

大谷女子大 ○岡 佐智子・福井雅巳 城南女子短大 雀部寿恵

目的 第1報と同じ目的で、調査対象を卒業を間近にした女学生とした。これは、この時期になると、就職、結婚が身近なものとなり、家族関係などを改めて認識しなおす時期であると想定することが出来るからである。

方法 第1報の回答者の子女(演者らの大学の最終学年の学生)を対象とした。質問項目は若干異なるが、調査方法、および結果の分析は第一報と同様である。

結果 両親や家族から先祖を祭ることを学んでいるか?の問への回答の割合は、それぞれ親の日常の様子を見て(4・2割)、仏事に関わって(1・4割)、親から話を聞いて(1・6割)であった。日常の生活態度と習慣が先祖の祭りを伝えていく様がよくわかる。また、毎日先祖を拝む学生も16名(0・7割)いる。一方、先祖の祭りについて学んでいないと回答した学生38人のうち31人が夫婦家族で育っている。次いで家での先祖の話、氏姓の話題の有無に関する質問では、兄弟姉妹の誰が姓を継ぐか(2・5割)、誰が墓を守って行くか(2・1割)を家庭で話題にしているが、その中でも姉妹だけの家庭では男子のいる家庭より姓の継承が話題になる事が多い。一方、話題にならないと回答したうちの8・5割が夫婦家族の中で育った学生である。両親の老後の生活様式について、3・2割の学生が両親の老後、両親と暮らしたいと回答しているが、母親が娘との同居を希望する割合(4・6割)に比べ低い結果を示した。両親の老後の介護については自分がすると思うとの回答が圧倒的に多く、親の病気に対しては、女性の介護するという従来からの女性としての義務意識が働いているとも推定される。